

史 談

2018 (H30) 11・15

■ 研修旅行に行ってきました

10月24日に「ぐるっと湯殿山ワンデーバスツアー」と称して、平成30年度の白鷹町史談会研修旅行を行いました。参加者は全部で23名でしたが、内会員は10名で、会員以外からたくさんの方々に参加していただきました。

コースは、荒砥コミセン（出発）→岩根沢湯殿山神社→丸山薫記念館→口の宮湯殿山神社→大日寺跡・大井沢湯殿山神社→注蓮寺→荒砥コミセン（到着）というコースでした。

岩根沢湯殿神社は案内人もなしでしたが、内部をそれぞれに拝観しました。

丸山薫記念館では、岩根沢に住んでいらっしゃる藤本さんが、私たちを見つけて案内をしてくださいました。



また、口の宮湯殿山神社からは、六十里越街道の案内人である布施範行さんが合流しました。布施さんからは、戊辰戦争で焼き払われ、廃仏毀釈にあった月光山本道寺の遺跡の整備などをなさっていることも含め、丁寧に説明をしていただきました。

最後の注蓮寺では、住職さんの軽快なお話とともに、白鷹町とも縁の深い鉄門海上人の即身仏を拝み、帰路につきました。案内、説明して

くださる方に恵まれ、充実した研修ができたと思います。当日の一般の参加者である高橋安治さんに感想を書いていただいたので、次に掲載します。（守谷記）

■ 「ぐるっと湯殿山ワンデーツアー」に参加して

荒砥仲町 高橋安治

「湯殿山」信仰とは何か。壮大な歴史・内容で、その一端をも理解出来ていない処ですが、10月24日(水) 町史談会、町教育委員会のお世話(立派な資料付等)になり、ツアーに一般参加の機会を得ましたので印象等を記します。

山の歴史を繋ぐ 東から①月山神社出羽神社湯殿山神社撰社(旧 日月寺) [通称 岩根沢三山神社]、②口の宮湯殿山神社(旧 本道寺) [通称 本道寺湯殿山神社]、③大日寺跡湯殿山神社(旧 大日寺) [通称 大井沢湯殿山神社]、④湯殿山注蓮寺を見学出来ました。

①②③神社共 明治の神仏分離で、寺号を返上し神社となり、これに伴い ①は早期(明治2年)に寺号返上した関係で仏具等の散逸は免れ伽藍は維持されています。山門・社殿の額は現在も湯殿山を継続、月山への登拝口として最も利用されました。

②の仁王像(阿形・吽形)は、明治8年に山を離れ 平成17年に130年振りに神社本殿に戻り、弘法大師像は 地元月岡の関係者に移され、明治20年にここを離れ、平成2年103年振りに本殿に戻りました。「本道」とは湯殿山(本宮)への本道との意味合いで、本道寺は村名としても昭和29年迄用いられました。(明治の合併では、志津・月山沢・砂子関・月岡・本道寺の各村が合併し、本道寺村を発足させた。)

③の大日如来像、阿弥陀如来像、観世音菩薩像は縁のある寺院等に移り散逸しています。神社境内前に現存する「大井沢地藏堂」は大井沢村長に引取られました。地藏尊の作者は、荒砥正念寺 阿弥陀如来、米沢市遠山観音 十一面

観音と同じ仏師です。

貞享年間に江戸誕生院より280匁の鐘が多数の信者によりのぼりを立てて引かれ、大日寺まで受継がれ奉納 信仰心の深さが伺えます。(現品は残念ながら昭和の大戦で供出されました)

平成10年に大形の燈籠が神社本殿前に一対(有志の方)、歴代方丈の墓前に一基(白鷹町 吉田石材工業) 献燈されています。

④は神仏分離で寺号を継続したが ご神体(御宝前・本宮)への祭祀権を失っています。注連とは「しめ縄」を指し、神仏混合寺であった事が伺えます。

なお、口之宮湯殿山神社から注連寺までツアーに同行し、丁寧な説明・解説をいただきました布施範行氏(大黒森プロジェクト 共同代表・六十里越街道ガイド案内人クラブ)に厚く感謝いたします。

■ 瑞龍院所蔵・繭文字額が奉納された契機について

石井紀子



繭文字額 (瑞龍院)



受賞記念のお猪口 (迎田家)

瑞龍院所蔵の繭文字額は、町内で蚕糸業が隆盛したことを伝える文化財として広く知られて

いる。この繭文字額が奉納された契機について、史談会会報 51 号 (2018 年 4 月 25 日) 「金田平三郎のお猪口と繭文字額について」に記載したが、この考察を補強できる写真をみつけたので、今回はこれを紹介したい。

先の 51 号では以下の 2 点について考察した。

① 繭文字額の奉納者である金田平三郎は、明治 36 年 (1903) に第五回内国勸業博覧会の繭の部門で一等賞を受賞しており (受賞記念のお猪口がある)、この受賞が額の奉納の契機になったのではないかと。

② 繭文字額には向かって右から「神」「威」「赫」の三文字が表されており、文字の下に貼り付けられた和紙に繭の品種が書かれているが、「神」の下の和紙は白紙で文字の記載はなかった。別の資料になるが、平三郎が記念に作らせたお猪口には金字で「又昔繭」と書かれており、「神」の下の繭は「又昔」でないだろうか。

前回は不明だった「神」の下に書かれていた繭の品種が、昭和 63 年に発行された『図説山形県史』に掲載された写真によって、繭の品種が判明したのである。これには「神」の下に「又昔」の文字が見え、加えて、金色の菊花紋の飾りがつけられている。



『図説山形県史』掲載 繭文字額の拡大

第五回内国勸業博覧会の総裁には閑院宮載仁親王がつき、受賞者へ贈られる褒章メダルの裏面に菊花紋を描いていることから、繭文字額に菊花紋を採り入れる理由として勸業博覧会が想起される。やはり、繭文字額の奉納と勸業博覧会の受賞はつながりがあるといえるのではないだろうか。

参考文献

『図説山形県史 別編 1』山形県編纂・発行
1988 p. 231

■ 歴史的資料は残してほしい

守谷英一

7月は夏休みの宿題のように、町の教育委員会からの依頼で白鷹町の紅花栽培のことを調べていた。

山形県の紅花栽培に関しては、村山地方を中心とする「最上紅花」については河北町の会田信一氏が『最上紅花史の研究』で詳細に研究されている（昭和47年に井場書店から出版されているが、昭和54年に高陽堂書店から改訂版が出されている）。しかし、置賜地方の紅花栽培についての研究はまとめられていないのが現状である。そこで、会田氏の2種類の『最上紅花史の研究』や白鷹町、長井市、南陽市の町史や市史、その資料などをひっくり返して紅花に関する記述をまとめることとした。

置賜地域の初期の紅花生産に関しては、本会の要職を務められていた荒川幸一さん、金田章さんがまとめてくださった「青木家文書」が役に立った。この文書は町の文化財に指定されているもので、『於新砥萬覚』と『萬金銀請取拂帳』という形で2冊の読み下した活字本にまとめられている。

この2冊の記述によって米沢藩が買い入っていた紅花の数量、買い上げの値段、畔藤村で開かれていた紅花市の様子がわかる。また、紅花の買い上げ量の割り当てに対し、馬場村の村役

人たちが引き下げを願っていたことなど。生産者が困っている様子も垣間見ることができる。

また、生産された紅花を入れる「花袋」には、高岡や下山、深山などで漉かれた和紙が用いられていたことも『於新砥萬覚』に記されている。

その深山和紙の最古の記録も「青木家文書」から発見できた。奥村幸雄先生の『深山紙』では、『萬金銀請取拂帳』に記された記録から、寛文21（1644）年の記録を最古の記録としていたが、さらに古い寛文19（1642）年の「寛拾九秋分萬金銀請取拂之帳」の三山（深山）村の記録に「一、壺匁九分 上りかミ」と記されていて、2年ほどさかのぼることができる。

もう一つの「青木家文書」記録である『於新砥萬覚』からは、さらに古い記録が見つかった。寛永14（1637）年12月18日の日付が記された覚に、「三山ちやうかミ三束、并ミのわた紙一束為上申候事」と記述されている。この記述によって、深山（三山）や箕和田での紙漉はこの時には既におこなわれていたことがわかる。私が調べた限りでは、これがこの地区での紙漉に関する最古の史料ということになる。

紅花のことに戻ると、江戸時代中頃以降は史料がきわめて少なくなってくる。米沢藩の記録には「花手」と称する税金のようなものの記録はあるのだが、それは生産実態をそのまま反映したものではない。ある時期に定めた分量に応じて、以降、時々修正を加えながら継続して割り当てられたものである。だから、実際に紅花を売ったり買ったりした記録を見つけないと考えた。

『白鷹町史』には、大貫吉左衛門についての記述が有り、そこに大貫家が取引している京都や大阪の間屋の記録が掲載されている。そこに7軒の紅花問屋の名前が記されていて取引があったと推測される。これは「備忘録」になっていて、おおむね、国寛（大貫家四代吉左衛門、遅日庵杜哉（ちじつあんときい）という俳号を持つ俳人でもあった）の時代のものと考えられ、

没年である文化6（1808）年までに作られたものと考えられる。きちんと内容を確かめたいと考え、教育委員会、江口儀雄さん、大貫英一先生、山形大学などに問い合わせたが所在はわからない。行方不明である。白鷹町の紅花取引に関わる史料はここまでとなった。

南陽市の市史編さん資料集が相当数出版されている。クモ博士として有名な錦三郎先生が中心になってまとめられたものだ。その12号には「紅花関係文書（江戸期）」として、南陽市に関わる文書が活字化されてまとめられている。その中に多勢吉雄家文書として安永7（1778）年に最上の仁三郎という人物が、上杉領から23貫目の紅花を買っていることがわかるものがあった。この史料によって、置賜地区では間違いなくこの年までは紅花が生産されていることが裏付けられる。

さらに新しいものがないかと調べていたところ、山形大学の岩田浩太郎先生が山形十日町にあった長谷川家の嘉永3（1850）年の「帳面」を調査した研究の中に、米沢藩領の小岩沢村から紅花を集荷しているという記述が発見できた。そのことにより幕末に近い1850年まで、置賜地区で紅花が生産されていることが裏付けられる。

従来、天保3（1832）年の「背曝（せなかあぶり）」という書物の記述により、この地域の青苧（あおそ、からむし）や紅花の生産は、養蚕の普及によって衰退したとして、片付けられ、私自身も、改めてその生産実態の解明を考えて見ようとはしなかった。先人たちのなさってくれた仕事によって、微力ながらも置賜の紅花生産実態の一部が解明できたと考えている（なお、このことについては、明年の3月に出される東北芸術工科大学紀要に投稿しているので、掲載されればそちらを読んでいただきたい）。

歴史的資料の収集や保存については、大変厳しい状況にある。ここ数日のテレビ報道でも、山形大学の阿部宇洋（たかひろ）先生の戦争資料館の資料が取り上げられていた。その中で、

取り壊されようとしている蔵の資料について触れられていたが、その蔵は西高玉の佐藤家の蔵である。私もすこし関わっていたが、内部の文書は米沢女子短大に寄贈されることとなったと聞いた。残ってよかったと感じている。

正倉院の御物についての放送を見た。正倉院の場合には、かけらのようなものも丁寧に保存されている。「平螺鈿背八角鏡（へいらでんはいのはっかくきょう）」は明治時代に修理されたときに、一部想像で補った部分があるそうだが、その正しさが剥落した部品が見つかったことにより証明されたという。ゴミとして廃棄されていたらそれは決して証明されないものとなっていたと考えられる。

さて、旧中山小学校体育館に保管されていた民具資料がようやく整理され、別の場所に移されることになったようだと言った。何度か見せてもらったが、部品がかけているような民具であっても購入した年月、金額、購入した店などの墨書があるものが存在する。また、丁寧にみてゆくと、「奥州式坐繰器」に分類されるものであっても、数種類のバリエーションがあり、それが実物としてあることに驚いた。整理に当たっては、まずは一つ残らず収納してほしい。民具は庶民の生活を知るのに最も適した歴史的資料であるから残してほしいと考えるのである。

どのようにしたら地域の歴史を知る資料を後世に残せるか、それを考えるのも史談会の役割の一つなのではないかと考える。

■ お知らせなど

今年白鷹町史談会の会誌『史談』の発行年度になっています。事務局長の怠慢により編集会議がもたれていません。お詫び申し上げます。なお、平成29年度、30年度の総会および研修会の時の発表者は発表要旨を掲載することになっています。ご準備をお願いします。また、会員の研究成果も募ります。よろしくをお願いします。（守谷）